

Sivaka-dvāra ㄱ atthhi

初期仏教に於ける「念仏」(buddhānussati)は須達多に始まり、提婆達多に終ると言えるが、須達多給孤独の帰仏物語に Sivaka-dvāra が、提婆臨終帰仏の偈に atthhi という言葉が出てくる。この二つは互に関係のない言葉であるが、この二者についての疑問を呈して諸賢の御教示を仰ぎたい。

I Sivaka-dvāra

給孤独が王舎城で初めて釈尊に見え、優婆塞となった時の話はやがて仏教界周知の故事となり、種々脚色増広されて、阿含本縁部の諸經典、広律の臥具法など、二十余の典籍に述べられている。S.10.8の概略を述べると左の如くである。

釈尊が王舎城の寒林に住して居られた時、給孤独もある用件で王舎城に来ていて、仏陀が世に出られたという事を聞き、夜のまだ明けきらないうちから起きて墓地への門にやって来ると、諸天が門を開けてくれ、町を出たが、急にあたりが暗くなったので恐ろしくて身の毛がよだち、引き返そうとしたら、Sivaka yakha が

徳岡亮英

姿を見せずに偈文で「百象、百馬、百驛車に着飾った百千の少女も、今一歩進む事の十六分の一に値しない、進みなさい、引き返すような場合ではない」と勧め、あたりが明るくなったので進もうとすると又暗くなり、引き返そうすると又 yakha の声。三度目に前進して、寒林で釈尊に見える事が出来た。給孤独がよくお眠りになられましたでしょうかと挨拶すると、釈尊は偈で「悟を得た者の眠りはいつも安らかである」と答えられた。

これに対応する雜阿含經五九二經は左の如くである。

釈尊が寒林に住して居られた時、給孤独小因縁があつて王舎城の長者の家に泊っていたが、家人が夜遅くまで御馳走作りに忙しくしているので、長者に、婚礼でもあるのか、王か大臣でもあるのかと尋ねると、明日仏陀とそのお弟子達を食事にお招きしているのだとの答。給孤独仏陀という名を初めて聞いて嬉しさに身の毛がよだち、長者は仏陀とその僧伽の事を詳しく話してくれた。給孤独明日が待てず、仏陀の事を色々思い返してよく眠れず、夜はまだ明けていないのに明けたと思つて城門に向つた。城門は初夜は外来急使の為、後夜は早出の人々の為に開いているが、城門

は開いていたので、やはりもう夜が明けたのだと思って城門を出たが、あたりが急に暗くなったので恐ろしくて身の毛がよだち、人、非人などから恐ろしい目に遭わされないうちに引き返そうと思つたら、城門の側に天神が住んでいて、城門から寒林までを照らし、「百馬、百驛車」、「雪山大龍象」、「金菩薩國女百人」の三偈を唱え、一偈毎に進みなさい、引き返すような場合ではないと勧めたので、給孤独が一体貴方は誰かと聞くと、天神は、自分は摩頭息捷大摩那婆で、昔長者の善く知っていた者だが、舍利弗目連に帰依したお蔭で天に生れ、此の城門を受け持っていて、それで貴方に進みなさいと勧めたのだと答えた。給孤独寒林で世尊に見えて挨拶し、世尊は偈で答えられ、ついで布施、持戒、生天の福事などについて説法され、給孤独仏法僧に帰依して優婆塞となった。そなたの名前は何かというのか、須達多と申しますが、身寄りのない者の面倒をしていますので、給孤独と呼ばれています、何処に住んで居るのか、拘薩羅の舍衛城に住んでいます、どうか一度舍衛城にもお越し下さい、色々お世話申し上げます、舍衛城に精舎があるか、ございません、精舎を建てて比丘達が滞在出来るようにして頂けるか、お出で頂けるようでしたら精舎を建てて、お越しの節には比丘僧の方々もお泊り頂けるように致します。世尊が黙って居られたので、給孤独は自分の招待を受けて頂いたので知って、仏足に稽首して辞去した。

この雜阿含五九二經が祇園精舎建立緣起の標準的なもので、これより簡単なもの、これより増広脚色されたものがある

Sivaka-dvāra v aṭṭhi (徳 岡)

つたりして、二十余の説話の新古は一概に決められない。大體に於て、パーリ文のものは簡で、梵文が最も増広されている。説話の伝承はスリランカに伝えられて固定したが、諸漢訳はそれ以後の印度本土に於ける増広を受けて中間的な存在となっている。Cv. は雜阿含五九二經の給孤独三帰の所までを伝え、南伝に於ける説話の伝承はここまでであると考えられる。MN の給孤独が「五百輛の車に品を積み、親友の王舍城の長者の宅に行つて居た」とする記述は梵文臥具事の *prahūtaṃ kulaskāma āḍaya* を指しているように見えるが、南伝が梵文の結婚話を知っていたかどうかは疑わしい。給孤独が初めて釈尊に見えたのは王舍城塞林に於てであつたと南伝も雜阿含五九二經も述べ、梵文破僧事、臥具事もその記述するが、他の漢訳經典の殆どと四分律とは迦蘭陀竹園であると。衆許摩訶帝經は竹林精舎から塞林に移つて居られたとし、梵漢藏の破僧事は四分律と同じく竹林布施の話がその前にあつて、話の始には釈尊は竹園に居られたとするが、話の中では釈尊の居場所は塞林に變つて居る。給孤独が初めて釈尊に見えて、優婆塞となり、祇園精舎建立の約束をしたのが果して塞林であつたのか竹林であつたのか、この歴史的な事実は今では知る由もない。

王舍城の城門は初夜と後夜とは開いていたとする記述は南伝中にはないが、北伝では梵文、藏訳、雜阿含經の外に、別

訳雑阿含經、中阿含經、十誦律にも伝えられている。賢愚經は初中後夜の三時とも開いていて、給孤独は中夜に門を出たと記述し、摩訶帝經は半夜に月明りで出門したとする。現代の Raiger の觀光案内書には Vibhara hill ㄱ Vipula hill との山裾の狹隘な所に外城の北門があったとし、Buddhist literature によるとして、ある日 King Bimbisara が温泉で浴みをして遅くなり、帰ろうとすると門(多分此の北門)が閉っていたので、Buddha と Venuvana monastery で夜を過した、という挿話を紹介しているが、果してその頃初夜と後夜とは門が開いているという制度があったのかどうか、単なる脚色に過ぎないのか、今はそれも知る事が出来ない。

雑阿含五九二經の話が知れ渡るにつれて、王舎城の北門には天神が住んでいるという伝説が生れたのであろう。yaksha の名前はビルマ版、Nalanda 版では Sivaka で、漢訳は尸婆(別訳雑阿含經)、湿波(中本起經)、大勢(十誦律)とあり、これ等は Siva 若しくは Sivaka の訳であると考えられる。やがてこの yaksha の名は門の名前となり、王舎城の北門は尸阿門(四分律)、大勢神門(十誦律)、善自在城門(破僧事)、城息門(中阿含經)などと呼ばれる事となった。

王舎城の北門に yaksha が住むという伝説が固定してから、或はそこに yaksha を祀る天祠が作られたのであろうか、給孤独がその天祠を礼拝したという説話が附加される事にな

る。雑阿含經には天祠礼拝の件はないが、別訳雑阿含經は念仏によって光明が其の身を照らしたので城を出たが、天祠があるのを見て礼拝したら暗くなったとし、摩訶僧祇律も祠門に廻向したら暗くなったとする。賢愚經は暗くなったのは天祠を礼拝し念仏心を忘れたからであるとし、中本起經はその祭神を湿波とするが、梵文では雑阿含經の摩頭息捷大、即ち Madhuskandha 天子がその祭神である。梵文ではこの神祠は śhaṇḍia⁽⁹⁾ となっていて、丁度日本の建物の鬼門の空地のような空地が門側に設けてあったのであろう。漢訳は大体念仏と闕説して天祠を礼拝したら暗くなったとするが、梵文は逆に、暗くなったので引き返そうと思いつつ śhaṇḍia を礼拝したら、天子が城門から塞林までを照らしてくれたとする。漢訳破僧事はこの件を欠いている。摩頭息捷大の話は古くからよく知られていたようであるが、南伝はこの話は知らなかったらしい。北伝でも、四分律はこの話を知らず、天神の偈のあとの給孤独と天神との問答で天神はただ「我是何阿神」と答えるだけである。賢愚經、五分律はこの話は知っていて、問答はないが、この天神は昔給孤独の親友であって今は天(五分律では四王天)に生まれていて、給孤独を守護したのであるとする。やがて、Madhuskandha という māyava で昔の長者の親友が舍利弗目連に帰依して四王天に生れこの城門に住んでいた、とするのがこの天子前生の定説のように

なり、別訳雜阿含経は「昔日親旧、善身摩納」、中阿含経「前世是汝朋友、蜜器年少」、十誦律「前世時は汝善知識、密肩婆羅門」、有部律破僧事「昔是汝善友、摩頭肩」などと記述されている。ただ、中阿含経は前世の帰依者に目連のみを挙げ、中本起経もそうであるが、後者は前身を「子親摩因提」として違つた名前になっている。又、摩訶帝経は「我昔曾為舍利子母名捺誡囉也、摩度娑健駄摩拏嚩迦」とあり他と際立つた相違を見せているが、この舍利子母名捺誡囉也とは何であろうか。舍利の子の母は舍利であるべきで、他本ではここに「舍利弗目連に帰依をした」という記述がある事を考えると、私には、この漢字九字のうしろに *Sariputramaudagalyāna* という梵語があるように見えてならない。

以上諸漢訳を中心に、祇園精舍縁起の中の問題点を検討したが、これら二十余の説話の中では梵、藏の臥具事が最高に増広され、その説話の前に賢愚経に記述されているような *Madhuskandha* の因縁話が附加されている。臥具事の漢訳がないのは残念であるが、梵藏はよく一致する。

給孤独が第七子の嫁取りに頰杖をついているのを見て、*Madhuskandha* と *manava* の *vayasya* (同年の、同年の者、友) が代りに王舎城まで行って結婚話をまとめ、要求された *kulasulka* (結納) を持って来るようにと手紙を書き、歓待され過ぎてコレラに罹って皆から嫌がられている所に舍利弗、目連に助けられ、

兩人に大いに感謝帰依して、そのお蔭で死後四王天に生れ、毘沙門天から、あの(王舎城の) *Sivaka-dvāra* の住人になれと言われて、そこに住みついた。一方給孤独は *kinicit prayojanena* があるからと波斯匿王から暇を貰い、莫大な *kulasulka* を携えて王舎城にやって来た。

以上の後に雜阿含五九二經と殆ど同じ本話が續くのであるが、人、非人などの恐怖の所で、雜阿含になく *kulasulka* の懸念が述べられ、前述のような天祠礼拝の件が続き、天子の三偈以下は又雜阿含とよく一致する。

梵漢藏の破僧事、梵藏の臥具事を比べて見ると、漢藏の破僧事が古く、*kulasulka* に言及せず、天祠礼拝の件もなく、城門所居天神 *sgo-na gnas-pati lha* が塞林までを照らしたとする。ただ藏訳にはこの門について漢にない語 *lho-phyogs-kyi* (Skt. *dakṣiṇā-dik*, 南方) が入れてあり、梵文 *stūpādīla* 礼拝の代りに所居天神としてその所居の門の説明として「南方」が附加されてあるのである。天神所居の門という気分、言葉は既に南伝からあり、古い伝承がここに顔を出しているように見えるが、ただ困るのは、南伝以来すべての説話ではこの天神所居の門は王舎城の北門であるように見え、又実際そうであると考えられるのに、ここで藏訳が南門と訳している事であり、藏訳は破僧事、臥具事とも数回出て来る門をすべて奇妙にも *lho-sgo* (南門) と訳していることである。

漢藏破僧事が古い形を保っていて、*kulaśūka* に言及せず、天祠礼拝の件もないという事は、梵文破僧事にもこの二件はもともとなかったが、増広された臥具事の中味をあつここに挿入したのであると考えてよいであらう。梵文臥具事は前述のように本話の発端の前に *Madhuskaṇḍha* 天子の因縁話を附け、門の名前も天子の因縁話に出て来る門は *Sivika* となっていて、天子がその因縁話を給孤独に話す所でも *Sivika* であるのに、本話に五回出て来るのは全部 *Sivaka* である。

即ち *Madhuskaṇḍha* の因縁話が出来た時、門は *Sivikā-dvāra* と呼ばれていたが、初期の祇園精舍縁起では *Sivaka-dvāra* であつたように見える。この *Sivaka* は *Gnoli* 本に出て来るもので *Dutt* 本は全部で七回出てくる七回ともすべて *Sivika* となっている。同じ *Gilgit* の写本でも時代が違ふからこういう事になるのか、又そこには校訂者の操作もあつていて、これは梵文で臥具事の中味を挿入した時にすべてを *Sivika* に統一したのであるように見え、写本では *Siva-dvāra* とあつたのを校訂者が前後に合わせて *Sivika-dvāra* に訂正した所もある。このような事は写本筆写の段階でも行われたと考えられる。そして最終的には、この門名の起源となつた *yaksa* の名前は *Sivaka* であつたと考えられ、これはある *yaksa* の固有名なのである。

問題はこの *Sivaka-dvāra* を蔵訳者が何故 *Iho-sgo* と訳したかである。門神の名前は *Sivaka* という固有名詞で、後に出来た話の *Madhuskaṇḍha* というのはその門神の前生の名なつてゐて、*Sivaka* という名は忘れられ、門の名前にのみ残り、*Sivaka-dvāra* の *Sivaka* という言葉の由来は忘れられたのである。梵文作者及其の蔵訳者は南伝、及別訳雜阿含經、中本起經、四分律などの夫々 *Sivaka*、尸婆、湿波、尸呵などとする天神名は知らなかったのである。四分律はじめは門神の名前は挙げずに門名を尸呵城門、尸呵門とする。尸呵は寧ろ門名としてよく知られていたのである。蔵訳者がこの *Sivika* がもともと *yaksa* の固有名であつた事を知っていたら、このような訳し方はしなかつたであらう。

玄奘の新王舎城は塞林に造営されたという伝聞、塞林と竹林が話の中で置き換えられるという事、考古学的にも新王舎城の西側壘壁の外側に塞林のあつた事が確認されているという事などから考えると、蔵訳者が *Sivika* を固有名詞と理解せず、門は東西南北のどれかであると考えたのなら、正しく北を取つて、北門、*byan-sgo* と訳すべきであつた。王舎城の南に塞林があつたと智度論は伝えるが、この説は靈鷲山の *śūdhra* の連想から来る安直な根拠のない説のように見える。ただ、新王舎城の南門跡は現在もはつきりしていて、塞林は

この門の近くであると考えられるから、蔵訳者はこの門の事を考へて Iho-sgo と訳したのであるかも知れない。

Sivaka-dvāra が Iho-sgo と訳されている事を初めて指摘されたのは Dutt 博士であり、Edgerton 氏は自分の辞書の中には是を取りあげている。然し、氏は、蔵訳は Iho-sgo となっているから *south gate* (of a city) である、とし乍らも、結局、I cannot explain *sivika*, と述べ、自分の推測を述べて、but this is equally obscure, とされている。實際不可解な訳である。というよりも上来の検討から見つ、*byah-sgo* と訳せばまだ解るが、Iho-sgo と訳すのは、これは Iho は *sivika* の訳ではないと考へるべきであろう。この語は元来は *sivika* ではなく、Gnoli 本は *siva, sivaka, sivika* などとなつていて、この中南伝 *Sivaka* と同一の *Sivaka* が本来の名であり、これは王舎城の多分北門に住んでいたと伝えられる *yakṣa* の固有名である。龍樹の「樹」が *Arjuna* の訳ではなく、又この蔵訳臥具事で前出の *vayasaya* を *śdan-groṣa* (Mv. 769d) という訳があり乍ら *nehu zla* と不可解な訳をしているような所があつたりして、蔵訳は時々そういう離れ技をする事があるのであり、この *Iho* も *sivika* の訳であるというよりも、訳者が何らかの理由でこれは南門であると思ひ込んだための所産なのであらう。多分 Dutt 博士の指摘も批判的な立場のもので、不審だが、という気持を持った指摘のよ

うに見える。諸賢の御教示を期待する者である。

二 aṭṭhihi

提婆達多はその破僧の行為によつて無間獄に墮し、一劫救いようがないと釈尊によつて授記され、その通りになつたとするのが諸広律の定説であるが、根本有部律だけは、提婆は臨終に帰仏して、墮獄はしたもの其の後天に生れ、究極的には僻支仏になると世尊によつて授記された、とする。この説話は *Jātaka* No. 466 *Samuddavāṇija-jātaka*; *Dhammapada-aṭṭhakathā*, *Devadattasa-varttu*; *Milindapaṇhā* などにも見える。*Jātaka* No. 466 の概要を述べると、

提婆は仲間からも親族からも見放されて前非を悔い、釈尊に赦しを乞ひに行つた。阿難のとなりなしも空しく、彼が床から降りるや否や、大地が割れて、阿鼻地獄の火が彼を取り巻いた。彼は如来の徳を想起しながら、

これ等わが諸の骨をもて、彼の優れし人

神の中なる神、人法の調御師

普く一切を見る人、百の福相を具足せる

かの仏陀に、わが生命もて、われは帰命し奉る

という偈を唱え、仏に帰依しながら阿鼻地獄に墮ちて行つた。

この如来の徳を想起するという事が念仏 (*Buddhānussati*) であるが、この偈文の「諸の骨をもて」というのが *aṭṭhihi* と

いう言葉である。この aṭṭhi の強烈な印象によつてこの偈はよく知られるようになったらしく、DhA. にもそのまま載つており、Miln. にも載つてゐる。Miln. では大悲者、一切智者と言われる釈尊が、破僧事によつて無間獄に墮するような提婆を何故出家させたのかというギリシヤ人詭弁家の王 Menandros の難問に対する Nagasena の答の中にこの偈が出て来て、提婆は臨終に帰仏したので、やがては Aṭṭhissara という paccekabuddha になり、彼の苦は終滅するから、釈尊は大悲者という名には背かない、というのが Nagasena の難問に対する答であつた。DhA. にもこの Aṭṭhissara の話は述べられ、提婆が臨終に帰仏した功德によつて僻支仏になるといふ話もよく知られた説話であつたらしい。

この Aṭṭhissara が aṭṭhi という言葉の強烈な印象から来た名前である事は明瞭であるが、これは梵文にも伝えられている。但し梵文には南伝の長い四句の偈は伝わらず、提婆帰仏の言葉は 'eṣo 'ham asthito'pi buddhaṃ bhagavantam saraṇam gacchāmi' という短い言葉となつてゐる。aṭṭhi という強烈な言葉だけは伝えられている訳である。又梵文では pratyekabuddha の名前は Asthinaṃ であつて、これは asthi (骨) に mat をつけたものであり、漢訳の「具骨」蔵訳の rus-pa can はそのままの直訳である。上述の南伝の四句の偈は人の今はの際の言葉としてはどちらかというときと長すぎ

る。この偈は aṭṭhi という言葉の面白さから喧伝されたのであつて、この偈は人の臨終の言葉としては真実味が薄い。短い梵文とその漢訳「今日我身乃至徹骨、於薄伽畔至心帰伏」蔵訳 bdag rus-paṭi khod-nas kyan saṃs-rgyas bcom-ldan lhas-la skyabs-su ḥgroho の方がふさわしい。更に増一阿含経卷四七、四九ノ九経の「南無仏と唱えようとして、南無までしか唱えられなかったから、南無という名の僻支仏になる」といふ説話は、勝れた脚色で真に迫つてゐる。

前述の梵文の asthito'pi は Gñoli 本によると、写本には asthitr api とあるらしい。Dutt 博士が asthito'pi と校訂してあるからとして Gñoli 本も asthito'pi としてあるが、この校訂は多分博士が脚注にあげてある蔵訳 rus-paṭi khod-nas の nas によるのであらう。この khod (内部) は北京版では khod (外観、表面) に見え、前者は「心」に通じ、後者は「身」に通じるが、果してどちらが正しいのであらうか。南伝の aṭṭhi は明らかに「身体」で、漢訳も「我身乃至徹骨」とあるから「身」に通じる khod の方がよいように見える。身体の時「身体で」と言うが、心の場合は「心から」と言う。Dutt 博士はこの蔵訳を from skelton と英訳して居られるが、一寸奇異である。by skelton とすべきではなからうか。nas は具格を訳す時も使用されるから、ここは asthitr api と校訂する方がよいように見える。aṭṭhi は

明らかに具格であるから、そうすると南伝以来の気分も生かされ、しかも写本の文字の形の上からでも、*bhiraṇi*の方が *toṇṇa* よりも *tiṇṇa* に近い。諸賢の御教示を待つ者である。

1 日本佛教學會年報五十四號、頁六五—八七、初期仏教に於ける「念仏」の体系について、徳岡亮英。

2 ① S. 10.8, Sudatto, ② 雜阿含經五九二經、③ 別訳雜阿含經一八六經、④ *Sārattha pakāsinī*, ⑤ 中本起經卷下須達品、⑥ 中阿含經二八教化病經、⑦ 出曜經卷二七(大正四、七五)、⑧ 賢愚經卷一〇須達起精舍品、⑨ 衆許摩訶帝經卷一(同三、九六六)、⑩ JN 4 *Santhe-nidana* (I, 77)、⑪ Vin. Cv. 6 *senāsakhandhaka-4* (Vin II. 154; Nalanda Ed. II. 492, *Anthapiḍikavathu*), ⑫ 四分律卷五〇房舍捷度初(同二二、九三六)、⑬ 五分律卷二五臥具法(同、一六六)、⑭ 摩訶僧祇律卷二三雜誦跋渠法一(同、四二二)、⑮ 十誦律卷三四臥具法(同二二、二四二)、⑯ 根本説一切有部毘奈耶破僧事卷八(同二四、一三八)、⑰ The *Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, Part I, by R. Gnoli, 1978, pp. 166-171, ⑱ *Īḍul-ba gshi, Dge-hdun-gyi dbyen-gyi gshi*, Ce 75a-78a (影印北京版四二卷頁五八—五九)、⑲ *Gilgit Manuscripts vol. III*, part 3, *Śāyāśānavastu*, by N. Dutt, 1943, pp. 138-144; ⑳ The *Gilgit Manuscript of the Śāyāśānavastu and the Adhikaraṇavastu*, do., pp. 14-18; ㉑ *Īḍul-ba gshi, Gnas-lam-gyi gshi*, Ne 136b-190a (同四一巻頁三二四—三六)。

3 南伝大藏經卷二八、小部經典六、一九八頁。

4 Cv. は給孤独の三婦までを述べ、その後はその翌日給孤独が仏僧を食事に招待したという違う話になっていて、これは四分律と同じである。給孤独が王舍城に來た用件 *kenaciḍ eva karaṇyena* を *Sārattha pakāsinī* の *vāṇijja-kamman*

(p. 311) (商用)であると注釈しているが、これは常識的な解釈で、諸漢訳は雜阿含と同じく「小因縁」、「少有所為」などとするが、四分律は「田業」、五分律は「三十万金錢年年來債」と少し立ち入った解釈をし、賢愚經になると「為兒求妻」という話に発展する。これは梵文とその藏訳の説と同じで、賢愚經の翻訳年代西歴四四五年以前に梵文の説話は成立していた事になる。賢愚經はこの前に「須達…大載珍宝趣王舍城」と述べ、これは梵文の “*prabhūtaṃ kulaśulkaṃ adāya*” に相当し、JN の記述とも合うが、果して JN の作者は仏音の知らなかったらしい梵文の脚色を知っていたのであろうか。JN のこの記述は *yakkha* の唱えた偈の先取りに過ぎないのである。

5 藏訳は *hdug-gnas* 即ち *Mv.* びだこれ *āvasaṭha* (5503) に当ててあり、小祠堂があったように見えるが、藏訳者がそう考えたにしても、ここは或は囲いだけはある空地のように見える。

6 根本説一切有部毘奈耶破僧事卷一〇(大正二四、一四九—一五〇) *Gilgit Manuscripts vol. III*, part V, *Saṅghabhedavastu*, by N. Dutt, 1950, pp. 234-236; The *Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, Part II, by R. Gnoli, 1978, pp. 260-262; *Īḍul-ba gshi, Dge-hdun-gyi dbyen-gyi gshi*, Ce 266b-267b (影印北京版四二巻頁一三四—一五) *Samuddavāṇija-jāṭaka*, J iv. 158; DhA I. 147-148; *Mīlā* 107-111。

7 *Mīlā*, *Mengakaramba-kathā* 1. 3, *Bhagavatā mahā-karaṇyā sabbaññatāṇena Devadattapabbajita-paṇho* (pp. 107-113, Siam Ed. pp. 156-163)。

8 大正二、八〇四—一六。

〈キーワード〉 王舍城北門、給孤独、提婆、臥具事、破僧事

(西山短期大学教授)